

# ミルトンの三大詩における高き主題

室田五郎

一、

ミルトンは自ら『パラダイス・ロースト』をうたうことは冒険であるといっている。<sup>(1)</sup>その無限のはてしない冒険の結果、<sup>(2)</sup>どんな危険があるかもしれないので甚だしい不安にみちている。

アオニヤ山をこえんためなり。わが歌は  
散文にも詩にも試みしことなき歌なれば、

(PLI 二一六)

これは飛行のイメージで不安をあらわしている。第九巻の祈りにおいても第一巻における不安と緊張と同じものを見出すことができる。<sup>(3)</sup>

われ彼処より

わが冒険の歌に汝のたすけを祈り求む  
中空の飛行をこえて高く飛翔し

われかかるものに

秀でず、又熱心にもあらず、より高き主題  
残る。それおのずとふさわしく高く、その

名を挙げんため、ただし世も末ゆえとか  
冷寒の風土とか、老齡ゆえに、歌の翼を  
鈍らすなら如何。その可能性大。もし独力  
にて、詩神夜ごとにわが耳に語らずば、

(PLIX 九四一—九四七)

このようにミルトンの『パラダイス・ロースト』はその  
祈りにおいて恐れにみちている。その恐れはその主題と深  
く関わっていると彼は言う。

その主題は旧約聖書の原罪の物語に関わる。それがどう  
して「英雄叙事詩と称するに足る主題」か。それは人の原  
罪を語ることが、神の正しさを語ることになるからであ  
り、そのためには彼一人では昇りえない上昇を必要とし、  
神の正しさを語ることは、神の強靱なる愛の力と、それに  
支えられて歩む人の信仰を語ることになるからである。

詩人は「悲劇的な物語」を第九巻のプロローグから始め  
る。その悲劇的な物語を語ることが神の正しさを示し、そ  
の神が人のために計る摂理が正しいことを大胆に語ること  
と関わるのである。

そのような詩を書くことは、言葉の限界をこえることに

なるかもしれない。それはこの世には見えない秘密を書く  
ことになるかもしれない。<sup>(5)</sup> そうするためには自分自身を神  
の立場に沈潜させることが必要であった。

ミルトンはその祈りにおいて、非常に不遜であるかのよ  
うに読者は思うかもしれない。<sup>(6)</sup> もしそうだとするならば、  
読者が彼の意図を悟らないからである。実は彼は徹底的  
に自分自身をへりくだって神の靈に耳を傾ける必要があつ  
たはずである。

人のはじめの不従順につき、又かの禁制の

木の実につき——その致死の味は

世界に死とわれらすべての苦を来らせり

エデンが失われて。ただし一人の大なる人<sup>(7)</sup>

われらを取返し幸いの国を戻すにいたる——

歌え天の詩靈よ

(PLI 一一六)

この偉大なる主題の高みにまで  
永遠の摂理を擁護できるように

又人に神の道を正しいと証しできるように

詩人が神の道を正しいと言うことは、彼自身をふくめて人が罪深いことを大胆にみとめることなのである。つまりそれは自分を否定することである。それは恥じ入ることなのである。だから祈りは恐れにみちているといえるだろう。

詩人自身が罪にみちており、その罪がゆるされなければならぬが、自ら求めて神のみこころをさぐるうとするのであるから、自分を徹底的に否定して神の靈に聞きいることが第一に重要であった。

神の摂理を神は撤回しない。神は神であるゆえに、永遠不変の摂理を変えるはずがない。人が神に背いても神の創造の原則を変えることはない。<sup>(8)</sup>ミルトンは神のこの不変なる真実に立って、人間のひ弱な、つまづき易い立場を放棄している。言いかえれば、そのような不変性に立たなければこの詩は歌えないのである。

神の創造の原則は聖なる祝福そのものであって罪を前提としていないのは当然である。それは善以外の何ものでもない世界である。そして神は善から善へとこの世界を意図

したのであった。<sup>(10)</sup>

詩人が神の創造の不変の原則に立つということはこの善の祝福の原則に立つことなのである。彼がこの詩の中で善と悪のテーマに熱心であるのはそのためである。

人には天使に次ぐ自由が与えられ、それが人を祝福するはずであったが、それがサタンのそのかしにあって罪を創造の祝福の中に入れこんだために、呪いに変わってしまった。それでも神は創造の原則を変えない。だから神が人を罪から救うという計画は確かであり、信すべきものであると読者に伝わるようにミルトンがこの詩を意図したと思われる。<sup>(11)</sup>

彼が人でありながら、神中心の視点をどのように歌うべきか。それがこのプロローグにあらわれた恐れであったと見てよいであろう。

## 二、

『パラダイス・リゲインド』のプロローグは次のようにはじまる。

われ先に幸いなる庭を歌えり、それ  
一人の不従順により失せたりと。今歌うは  
すべての人に回復せる楽園のこと、それ  
一人の人の固き従順により完全にすべての  
試練により明白となり、試みる者すべての  
わなもくじかれ、敗れ、撃退され、  
荒野の中にエデンが建てられたることを。

(PRI 一七)

サタンは飢えたイエスに(自然)の珍珠(II三三三)で誘惑するが、全被造物を受ける権利のあるイエスにとつては何の意味もなさない。それは差し出がましいことである。

サタンはイエスの節制を見て、そこに高邁な意図、高邁な行動があるようだが、それにふさわしい偉大さが必要なのに、それが欠けていると指摘し、富をもって偉大さを得よとすすめる。

イエスは、偉大さの本質は王者の徳にあるといい、特に諸国民を神の道に立ち返らせることが大切であるという。そして地上の財宝を王者の權威に用いることの愚を説く。しかも、地上の王権には彼自身興味がないことを示す。

イエスはサタンを恥じ入らせ、罪意識に苦しめる。そこでサタンは一步さがって、王者の徳が榮譽をうけることは当然であると、イエスが称讃をうけることに興味を抱くように誘導しようとする。

しかしイエスは人の価値判断による称讃は全く有害であるといい、

何がよるこびか、かかる者に賞されること

彼らの舌にのり、話の種になることが。

彼らにけなされることこそ大いに誇らんに。

(PR III 五四—五六)

という。

そしてイエスの本心は、

わが栄光でなく神の栄光を求む。

われ神より来しことをかく明らかにせん。

(PR III 一〇六—一〇七)

ということなのである。

人が罪あるものなのに、榮譽を求めることが間違いであり、その間違いに手をかしているのはまさにサタンであるといエスが言い及びそうになったとき、サタンは言葉失つてしまふ。それはサタンの尤もらしい言葉は動機が不純で、その誘惑の意図がイエスによって見透かされているからである。

サタンはそれでもこりずに、なおもイエスにもつとまじめな提案をする。彼は王位につくべき預言のもとに生まれたイエスが心を動かしそうなテーマで議論をしかける。すなわち王となるべき人物が王位に興味をもたないとしたら熱心さと義務につき問題があるのではないかといつて、サタンはイエスをジレンマに陥れようとするのである。そしてローマ帝国に支配されているダビデの子孫を早く統治せよと促すのである。

しかしイエスは、神の計画には、神の定めた時があり、それに従うよりほか彼の熱心さと義務とを行つ道がないと答え、

されど汝に何の係わりあらん、いつの日に  
わが永遠の王国を始めるとも。何ゆえ汝

案ずるか。何ゆえ汝は問い迫るか。

汝知らぬか。わが上昇は汝の下降なるを、  
又わが増昇は汝に破滅となるを。

(PR III 一九八一—二〇二)

という。

この問いはサタンの心配がいつわりであり、サタンが預言の完成を促すことは、サタン自身の没落を早めることを意味するから、もっとも手痛い攻撃となる。

しかし見のがせないイエスの言葉がある。それは彼自身の受難の預言とその目的についての発言である。彼ははつきりとした目的をもってすべての誘惑にも試練にも耐えていく。それが神のみこころなのである。

神は知るならん

わがくるしみと服従とを。

(PR III 一九三一—一九四)

その苦しみが神の最高の榮譽をうけるために必要なのである。

しかしサタンはイエスに、世の中の経験不足が王者の資格をみださないことを説き、王者の資格は権謀と陰謀に長けることであるから、世界を見せようと山の上につれていく。イエスはサタンによる幻を見せられる。

サタンは王者の模範として先祖の王ダビデを挙げて、政治的に同胞を解放することこそ真に預言通りに王者になる道であるという。しかしイエスはサタンの熱心さが偽善的であることを見抜く。そして王が国民に果たすべき本当の解放とは、悔い改めて神に立ち返らせることと、罪から解放することであるので政治的な熱心さは反って神に罪を犯すことであると、旧約の記述をおもいおこさせる。詩人はこれを真理と虚偽の争いと説明する。

第四巻に入って、ますますイエスとサタンの価値観の差が明らかになる。イエスは神の「時」と「方法」にしたがって神の最善をもたらそうとするが、サタンはあくまでも自分をイエスの恩人として位置づけようとする。

言いかえれば、イエスは神に視点を向けるのにたいし、サタンは、自分にはまだ取り引き材料があると思つていく。つまり、サタンはイエスを世界の王たるにふさわしく権威づけする助けをすることができると考えている。そし

てそのような意味でイエスに提案をし、恩を売ろうとしている。そして自分が支配している世界を、彼を主とあがめるならば、差し出そうと言って、取り引きに乗り出すのである。つまりサタンの恩恵により、人がイエスを世界の王としての権威をみとめるに至るだろうというのである。

それによつてイエスは、

聖書に曰く

いましめの第一は、汝拝すべし

主なる汝の神を、又神にのみ仕えるべし。

しかるに全き神のみ子にたいし敢えて

呪われし汝を拝せしめんとするか。

(PR IV 一七五—一七九)

という。この見解の相違は、世界の王としての権威は神からのものか、人からのものか、という論争に尽きるであろう。

サタンは世界を実質的に征服し、支配している。それゆえイエスが世界の王となるという預言を快く思わない。しかしサタンはこのイエスが本当にその資格があるのかどう

かを試しつつ、不遜にも自分の経験から知りうるかぎりの提案をなし、神の預言にも自ら協力する態度を示しつつ、ひそかに、自分をイエスより優位に立つように取り引きをしようとするのである。その条件として自分を主として拜させるということは、正に悪魔の本性をあらわしたものである。

そのことを指摘されたサタンは、さらにイエスを試みる。しかし今度こそは本当にイエスのためを思っていると付け加えて、真の権威には智恵が必要であると、異教の世界にさかんになった哲学を、異教の文化との対話のために学ぶべきであると提案し、さらにその哲学が本当の王者の権威に役立つことをイエスに説得しようとする。

しかしイエスはそれに答えていう。その哲学の権威は神からのものではなく、根本的な罪について無知である。それは自分の榮譽のみを求めて、神を責めて、人のことをかえりみない神であると批判し、しかも神を運命とか宿命とか呼ぶと。

さらにイエスは「旧約」聖書の中の預言書がギリシアやローマの弁論よりも正しく神の永遠の目を教える王者の最上の教育書であると言い、イエスが王者の指針として預言

書を重んじていることを明らかにする。

ある意味では、サタンのイエスにたいする試みは、預言されている王国の本質を探ろうとしたものといえる。サタンはごく常識的な意味でこの王国を予想していたが、イエスとのやりとりで、彼のいかなる提案も役に立たないとわかり、王国の実態が掴めないばかりか、その王国の存在すら本当に実現するのか怪しみ、何かのたとえではないかと思ひ、わからなくなる。

このまま引き下がるのでは、サタンは気が晴れない。そこで預言そのものの不明確さを示して、最後の試みをしていう。

天使ら<sup>(23)</sup>それをのべしが、秘したり

その時と方法を。すべて果たされよ、正しく  
迫られずして、いとよき時にこそ。

もし汝これを守らずば、必ず受けん  
われ先に言いしごと、多くの辛き試練を。

そは危険、逆境、苦痛一杯。

かくて後汝イスラエルの王座に坐さん。

(PR IV 四七四―四八〇)

しかしこの誓しも功を奏さないとわかると、

さらばきけ、ダビデの子、処女の子よ。

それ神の子とはいまだわれ信じ難し。

(PR IV 五〇〇—五〇一)

といたり、

汝はわが宿命の敵なるぞ

(PR IV 五二五)

といたり、心の動揺を示すが、まだイエスの実態を知りつくしていないので、外の方法でイエスの本質に迫ろうとする。

そしてイエスを神殿の尖塔の上に立たせようとして、

さて血筋を表せ。立てぬとあれば

自ら身を投げよ。神の子なら無事ならん。

それ聖書に曰く、神命じたまわん

汝につき、自が天使らに。彼ら手をもて

汝を支えん、いかなるときにも

汝の足を石に砕くことなからんために、と。

(PR IV 五五四—五五九)

という。しかしイエスが「主なるなんじの神を試むべからず」という聖句をもってサタンに答え、そのまま尖塔に立ったので、サタンはおどろいて落ちた。これはサタンにとって最も期待しなかったことだったろう。

善天使らはイエスに近づき、彼を迎えて下ろし、食物を捧げた。そして、

幸あれいと高き神の子、王国と地の世継ぎ

サタンの征服者、汝が栄光あるわざに

今こそ入り人類を救い始めたまえ。

(PR IV 六三三—六三五)

とうたうのである。

所詮サタンは神の王国の実態がわからないのである。罪あるサタンが理解できることは、力が富か名声かであり、イエスと考えが全くすれちがっているのである。だから果



たしてこのイエスが預言された王なのかどうか、サタンにはわからない。しかしサタンには、イエスがサタンに罪意識と恥ともって苦しめる神の目をもっていることはわかるのである。

いずれにせよ、この詩の背景は福音書の物語であって、イエス自身の宣教活動以前のこととして舞台が設定されているから、まだ神の王国がどのように実現し、王権がどのように示されるかわからないことにはなっている。いや、福音書に登場するイエスの十二弟子は一人のこらず、イエスの宣教活動と行動を共にしていたにもかかわらず、神の王国とイエスの使命の実態について誤解していたのである。少なくともイエスの復活とその後の聖霊降臨の出来事まではそう思ったのである。

とにかく神の王国の実態についてはサタンの近視眼的な予測や想像をこえるものであり弟子たちの期待や願望を裏切るものであった。けだし神の摂理は人の思いの及ばぬ方法で行われる。その王国は、サタンが罪をもって支配し、死をもって征服しているすべての人の罪をイエスが神の権威をもって「罪なし」と宣言することによって始められた。

ミルトンは『パラダイス・ロースト』において御子が人の罪の呪縛を解くことがサタンの世界支配を無力にする最も有効な戦略となったことをすでに示していること(24)を讀者は思いおこすべきである。

### 三、

サムソンは旧約聖書の中の人物である。彼は神の民で、生まれつき祝福された大力の英雄的人物である。彼はイスラエルの敵ペリシテの国を大いに悩ませたが、ペリシテの女デリラの誘惑のわなにかかって囚われの身となり、眼をくりぬかれ、力の秘密も知られて無力な存在となっている。

傑出した人物が運命により没落するのが、型にはまった悲劇物語だとするならば、このサムソンの物語もその悲劇のパタンに合っているといえるだろう。(25)

この詩はサムソンがガザの獄で呻吟しているところからはじまる。この日ペリシテ人らはサムソンの災いから救われたことを感謝して祭りを催そうとしている。

ペリシテの役人が獄に来てサムソンに、ペリシテの守護神ダゴンの祭りに大力を披露するようにと命じる。彼は神

の民であるから異教の祭りに参加できないと拒絶した。

この時点で彼が自分自身の罪のために、神と同胞に恥を作ったことをひたすら後悔していることがよめる。彼が役人の命令を拒んだのもこの後悔があったからである。

彼らの奴隷なれども、道化となり

悲しみと心のなげきのただ中で

彼らに力わぎを示し、彼らの神前で演ずる

のは恥の恥、さらにわが上に

果てしなき軽べつを受くか。われ行くまじ。

(SA 一三三八—一三四二)

しかし彼は囚われの身であるから結局拒絶できないことをしり、「命のためなら誰しも目的をかえる」(一四〇六)といて命令に従うのである。この決意をしたきっかけは、<sup>(26)</sup>コロスとサムソンのやりとりの中に見出されるが、やや唐突なのでよく理解する必要がある。

サムソンが生きることを第一に考えていることがわかるし、また命令に従うことが死を意味するかどうか彼自身分からないうちで決まっているので、決して自暴自棄ではなく、冷

静さがあることが明らかである。まして自殺を意図したとは考えにくいであろう。

サムソンの考え方の中には、これ以上神及び同胞に恥をもたらしたくないという決意がある。その決意の中に彼自らの心の痛みの苦しさ<sup>(27)</sup>と深さが存在する。それゆえに二度とこのようなことはしないと決意がある。

それを二度とくり返さぬために自ら招いた罰が死ぬほど辛いものであっても、いや死をもつてつくなってもまだ足りないくらいであったらう。

そしてサムソンの悲劇の深みを最も明瞭にうたい上げているのは六五二行からのコロスの声であろう。とくに六六七行から見ても。

先祖の神よ、人は何ものなるか。

汝人にたいして様々な支配をもって

いや不都合なる支配というべきか、

人の短き生涯の中に摂理を変化させる、

一様でなく。されど汝が一様に治むるは

天使たち。又低き生物ら。それ声なく、

理性もなく、知力なきゆえに。

されどわれ語るは、汝が蔽爾にえらび

才能と恩恵を与え、気高く装いて

大いなるわざと、汝の栄光と、

国民の安寧に招きし者ら。彼ら勞少なからず。

されどかく地位高き人々にたいし汝屢々

彼らの最盛の頂点のさなかに

汝の面をかえ、汝の御手をかえ、毛ほども

過ぎし日の汝の上なき愛顧も

人から汝への奉仕も思わず。

汝は彼らを格下げるか、目立たぬ

生活へ送るなら、公平なる放免ならん

されど汝が高めしより低く彼らを投げる

人の目には見苦しき没落

罪や怠慢にたいして余りに痛まし、

汝は屢々彼らを異教徒や邪教徒の

憎むべき劍の犠牲にし、彼らの屍体を

犬や猛禽の餌にするか捕りよとなし、

又は時代が変わり不正なる裁きに服させ

忘恩の輩の宣告に服させる。

彼らがこれらを逃れても、恐らく貧困と

病のうちに彼らを汝は打ちひしぐ、

痛ましく、みにくき病もて、

まだ老いぬ年なるに老いぼれて。

不節操にあらざるに、理由なく苦しむ、

不節操の日々の者の受ける罰を。遂に。

正しきも正しからざるも同じくみじめ。

屢々同じに二者が悪しき終りになるゆえ。

かくは遇するな、昔の栄光たりし戦士を、

汝の似姿を、力あるしもべを。

われ何を乞わん。汝すでにいかに遇せしか。

みよかかると痛ましき姿にある彼を。変えよ、

彼の苦しみを安らかに、汝能うゆえ。

(S A 六六七―七〇九)

とくに六六七行はヨブ記七17を思わせる宇宙的な問いで

ある。それは人類全体の運命を暗示していないだろうか。

ここに人の悲劇、とくに神の御子のあがないの死による神

の義があらわれなかつたら人がすべて神の怒りの下にある

筈だとパウロが主張する、その呪いの暗さを深く暗示して

いる。

しかしミルトンの詩にあらわれる神は古典的な「運命」のように盲目的な存在ではない。神は徹底して悪をしりぞけ、罪を罰し、御自身の正しさを明白にする神である。他方、人は神のこのようなさばきに耐えられぬ存在である。このことをコロスはこの詩の終り近くでうたう。

死ぬべき人のおろかさよ。

神の怒りをうけて

果てはおのが上に破滅を招き

分別なく、悪しき思いに渡されて

内なる盲目の病に打たれ。

(S A 一六八二—一六八六)

右にあげた五行をふくむコロスの一六六九—一六八六行は読者に、サムソンを通して人類全体の姿をも見るように促しているといえるだろう。しかし、残る一六八七—一七〇七行のコロスの歌は、死んだも同然のサムソンを不死鳥にたとえて、死んでも名を残したと讃える。

この後半のコロスの言葉に刺激されたかのように、父親マノアが必死になってわが子の死を美化しようとする。わ

が子のために英雄の墓を建て、伝記を書かせるといい、彼の死は永遠に若い戦士たちの憧憬の的となり、若い未婚の女性の同情の的になることをすでに夢見ている。

このマノアの言葉のあとに結びのコロスの歌がつづく。だがマノアの言葉をとびこえてコロスからコロスへとつなげて読むとき、この詩の正しい理解ができるであろう。それを要約すれば次のようになるであろう。

相手を殺したが、自らも殺された。それがこの英雄の運命であった。神を侮った民は心暗く、神の罰をうけた。この英雄は心照らされて、死に等しい状態から不死鳥のごとくに立ち上がり、永遠に名を残した。かくのごとく神の摂理は、人の疑いをこえて最善である。神はおのが民に神の証しを立てて平安を与えてくださった、と。

心照らされて不死鳥のごとくに立ち上がったということ、自ら心暗く神に逆らっている盲目的な地獄のような状態から、自らの自由な決断をもって神の罰に服従するという強靱な意志と実践のために立ち上がったということであり、それは自分自身に固執するという苦しさから解放されたということである。

これは旧約聖書の物語を材料にした詩であるから、福音

の光をまだ知らない世界であるが、しかし本心に心碎かれて神に服従するものは、たとえどんなに苦しくとも神を知らぬ迷いの暗やみより、神に叛逆する地獄よりも幸いであり、恵みであるという詩篇詩人の心に共通するユダヤ的な(28)雰囲気(29)を伝えているといつてよいであろう。

それゆえに永遠に名を残したというコロスの言葉も、罪あるサムソン自身の功績を賞揚するのではなく、サムソンが神のみこころに逆らったが神に立ち返ったゆえに神の側に立つ者となり、そのゆえに彼は神の栄光に参加するものとなったということだろう。

神はどんな罪や悪によつても、明らかにした予定のわざを妨げられることがなく、そのことをコロスが讚美してうたったと見ることが正しいであろう。

人は罪や悪を犯し、それによつて悲惨なる罰を与えられることになるが、神の予定は人の悪と罪深さに勝つのである(29)。

マノアが言うようにサムソンが勝ったとか、名誉をになつたとか、この詩の中で問題とされているのではなく、サムソンが死んで神の民がダゴンに拜跪したのでもなく、ダゴンが神に勝つたでもない。そんな小さなレベルでの勝

敗が神の栄光を左右しないことをこの詩全体が示している。

しかしそのことは人の思いと如何にかけはなれているか。人の思いをこえる神の前に立つときマノアもコロスもただたじろぐばかりである。マノアは次のようにいう。

ああ、われ思えり。神がいと高き目的に

一度えらびし者を、弱さゆえに咎ありとて

神はかくも打つことも、又しもべとして

彼をかか悪しき冷遇に落とすはずなしと。

先ごろの偉業を讃えることはなきか。

(SA 三六八―三七二)

マノアの心には、神と人間的な取り引きをしようという傾向が見えるが、神はそのようなことで人をかたより見ない神である。

コロスも痛々しい叫びをあげていう。

かくは遇するな、昔の栄光たりし戦士を、

汝の力の似姿を、力あるしもべを。

われ何を乞わん。汝すでにいかに遇せしか。  
みよかかる痛ましき姿にある彼を。変えよ、  
彼の苦しみを安らかに、汝能うゆえ。

(SA 七〇五—七〇九)(前出)

人はこえられない定めの前にくろたえる。しかしそこで  
人は神の見えざる権威をみとめざるをえなくなる。  
この詩には何回か神の撰理に言及がある。

されど待て、われ無分別にうたがわず

神の預言をば。

〔サムソン〕

(SA 四三—四四)

されど黙せ。われいと高き方の配慮と  
争うべからず。この中に

おそらくわが知識の及ばぬ目的あらん。

〔サムソン〕

(SA 六〇—六一)

神の配剤を責むるなかれ。最高の賢人も  
あやまち、悪女に欺かれたり。

〔コロス〕

(SA 二一〇—二二二)

神の道は正し。

人に正しと証しうるもの、

〔コロス〕

(SA 二九三—二九四)

これらの延長上にコロスの最後の言葉を読むことがこの  
詩全体の意味を明らかにするであろう。この詩を最後まで  
読んで、読者はコロスのいうように「すべては最善」と結  
論することに戸惑いをおぼえるかもしれない。

「すべては最善」というのは神中心の考え方であって読  
者の感想ではない。<sup>(30)</sup>それはミルトン自身が読者に要求して  
いる洞察の目であって、彼は読者が安易な人間の次元の読  
み方することに敢て挑戦しているというべきであろう。

この詩は歴史上に特殊な位置を占める「神の民」の物語  
であり、そのことを考慮に入れて神と人との関係を洞察せ  
ねばならないが、この民の歴史がやがて、この民の限界を  
こえた神の福音につながることを考慮するなら  
ば、ここに神と人との関係の基本的な問題がかかわってい  
ることを読者は理解すべきであろう。

この詩の中で、神の正しさが人の罪をいっそう明らかにし、人の罪が神の正しさをいっそう明らかにしているといつてよいだろう。神にえらばれた者が、心を神から遠ざけることが心の安息を遠ざけることになり、神に立ちかえることが安息を回復することとなることをこの詩は示している。

しかし神の罰が肉体的に軽くなったというのではない。どんなにかつて英雄的であったにせよ、サムソンが神のみこころを自分自身の恣意的次元に従わせようとしたためにうけた罰は消えないのである。彼が勝手に自分の行動を正当化しようとしても、それは報われなかった。そのため悲劇を招いた。

だがその罰を心からうけ入れる気持ちに変わってからは、その重荷を平静な心をもって負っていったのである。これは悲劇と呼べるであろうか。ギリシア的な意味でなく、聖書的に見てどういう悲劇であろうか。

人の罪ゆえに人は神の怒りの下にある。そしてその神の怒りを真になだめることができない。ミルトンはクロス(33)の歌の中でこのことを訴えようとしているのであろう。それは、われわれがこのサムソンの結果から理性による平静さ

を学びとるように、読者にすすめている。

ミルトンは『パラダイス・ロースト』の第九巻のプロローグにおいて、チヨースターの『トロイラス』の悲劇の場合のように筆の重さを呻いている。その詩の終りでアダムとエバは「内なるパラダイス」を心に与えられながらも、エデンを追放されなければならなかったのである。

ミルトンの考えでは、死の罰をうけた人類の死を悲劇と考えたにちがいない。人類はこの原罪と死の定めとを負いつつ、すべてが生かされるべく世界におかれている。『パラダイス・ロースト』の中の御子についての預言はアダムとエバに希望を与えたが、それはエデンの追放を耐えやすくしたのである。

#### 四、むすび

ミルトンの三大叙事詩を結ぶものは、聖書が示す神の摂理であるが、すべての人の思いをこえる神の御計画であり、人の恣意的な期待を裏切るものであり、予想のつかない人の叛逆も罪ものりこえて予定通りに実現するものであることを証しするものとなっている。

それは人の目で見きわめられることではなく、信ずべきことである。しかし信じる者にとってすら屢々戸惑いを与えずにはおかないものである。ミルトンはその戸惑いを与えるものに敢て深く切りこみ、のめりこんでいった結果が三大叙事詩となったようにみえる。しかしそれをなしとげるには彼自身の強靱な精神を必要としたことは想像に難くない。

ミルトンは人の思いをこえるものの中心的なテーマを「高き主題」としてかかげ、おそれにみもなかがりも、神の見えざる御手、理解をこえた御手を正しいとし、逆らう悪魔も、神をけがしたサムソンさえも「神のみこころを知らずして成就することになった」(P R I 一二七—一二八)ことを示すのである。

ミルトンはプロテスタントの流れに立つ伝統的な教会のつながりから止むなく外に立つようになった詩人であり、独り聖霊のみちびきに頼らざるをえず、独立した立場に立った一信仰者であった。

彼は聖書の正確な読み方を求め、純粹な理解と信仰を追求し、それを理性の冷静さと強靱さに変えてうたった詩人ということができらるであらう。その理性が神に立つヒロイ

ズムであり、雅量であり、クリスチャン・ヒューマニズムであり、神義論であったのである。

#### 注

- (1) PL I, 15.
- (2) Mary Lascelles, *The Rider on the Winged Horse*, in *Elizabethan and Jacobean Studies Presented to F. P. Wilson*, Oxford University Press, 1959, p. 195ff.
- (3) Roger H. Sundell, "The Singer and his Song", in *the Prologues of Paradise Lost in Milton and the Art of Sacred Song* (ed. by J. Max Patrick and Roger H. Sundell), Madison and London, University of Wisconsin Press, 1979, p. 80.
- (4) Roger H. Sundell, p. 78.
- (5) *Vacation Exercise* (1628) II, 33-52.  
ミルトンはこの作品の中で神話の神々のイメージを用いながら、すでに英語で全宇宙の神秘を語りたいという野心をのべている。
- (6) R. H. Sundell, p. 73.
- (7) イヒム・キリストを指す。
- (8) PL III, 120-28.



- (9) Virginia R. Mollenkott, in *A Milton Encyclopedia*  
Bucknell University Press, 1978, Vol. 3, p. 115A.  
PL V, 153-59.
- (10) PL I, 62-63.  
PL I, 218-9.  
PL VIII, 357-63.
- (11) PL XII, 469-78.
- (12) トキヤヲ聖ト。  
ヤホク・キルクニ聖ト。See PL I, 4.
- (13) PR II, 324, 379.  
II Cor. 1: 16-8.  
Heb. 1: 2.
- (14) PR II, 387.
- (15) PR II, 422-7.
- (16) PR II, 473-83.
- (17) PR II, 484-6.
- (18) PR III, 1-4.  
PR IV, 22.
- (19) PR III, 145-6.
- (20) PR III, 137-4.
- (21) PL X, 406.

- (22) ヤホクニト云ハレヨリノ聖ト。
- (23) PL XII, 404-8, 431. (Rome 8: 2)
- (24) SA 667-704.
- (25) ロックの役割は様々な論じられてゐる。  
①サヤンと全智なる神との交わりを理解する役割。  
②サヤンとソツマンの偏見との接点を理解する役割。  
③サヤンとソツマンの「神田畑」である存在。ロックは「衆  
人なるため」と回をなす「あなた」というある「まじな問」を  
聖の「ひあひ」の姿をなせようとする。
- John F. Huntley, in *A Milton Encyclopedia* Vol. 2,  
p. 45B.
- (26) Rome 3: 23-24.  
Rome 2: 5.
- (27) See Psalm, 1: 1-6.  
Psalm, 42: 1-4.
- (28) Cf. PL XI, 359-60.
- (29) Hanford quoted in John Carey and Alastair Fowler  
(ed.) *The Poems of John Milton*, Longman, 1968,  
p. 334.
- (30) Cf. PL IX, 51-1059.  
PL IX, 1070-1080.

- (33) Cf. *PL* XII, 557-9.
- (33) Rome 3 : 25.
- (34) *PL* IX, 5-13.